

<平成27年度「活動報告」抜粋／HP「活動報告ブログ」>

I. 東日本大震災5周年チャリティーイベント「あの日をつなぐ」



日 時：2016年3月6日（午後1時30分
～午後4時45分）

場 所：文京シビック大ホール

内 容：〈1部〉3Dドキュメンタリー映画
「大津波 3.11 未来への記憶」
〈2部〉鈴木あい ミニライブ
池上 彰 講演

入場料：無料

参加者：1,200人

主 催：石巻支援三七会

共 催：文京区

後 援：宮城県、岩手県、石巻市、㈱NHKメディアテクノロジー

協 賛：㈱ニコン

協 力：宮城ふるさとプラザ、いわて銀河プラザ、㈱プロテック、気仙沼ワークス

東日本大震災から平成28年3月11日で満5年になるのを機に、“あの日を語り継ぐ” イベントを東京の文京シビックで開催しました。

日曜日の昼下がりにも拘わらず、文京シビックには、開場の1時間余り前から長い行列ができました。



開場時間を予定より少し早めて受付を開始。

1階席はまたたく間に埋まり一部の人々は2階席へ、という状態になりました。



開会の冒頭、参加者全員が東日本大震災の犠牲者に黙とうを捧げました。



第1部はドキュメンタリー映画「大津波 3.11 未来への記憶」の上映。



この映画は、NHKメディアテクノロジーが3年にわたって継続的に映像記録した「世界唯一の震災3D映像」をベースに、ようやく心を開いて語りはじめた人々に取材を重ね、海とともに生きる島国日本の「自然と人間」「破壊と再生」「過去と未来」「家族」を問いかける大型ドキュメンタリー作品で、去年3月、仙台で開催された「国連防災世界会議」でも上映されました。



膨大な被災地をリアルに描き出すダイナミックな映像と、未曾有の災害に遭遇した体験を語る5人の物語に場内は静まり返り、「あの日」を改めて心に刻みつけるように見入る参加者の姿が印象的でした。

第2部は、鈴木あいさんのミニライブで始まりました。



鈴木さんは、東京を中心に活動しているシンガーソングライターで、月1回、気仙沼市を訪れて幼稚園や老人施設を慰問しています。オリジナル曲など3曲をピアノの弾き語りで披露しました。

カバー曲の「花は咲く」では、ハンカチを目にある女性客も見られました。

第2部の後半は、池上彰氏の講演です。

テーマは「これまで、そして、こらからの日本」。



池上氏は先ず、「東日本大震災は第2次世界大戦につぐ第2の敗戦」とし、巨大地震を想定できなかった「地震学者の敗北」「政治・行政の敗北」「原発災害の敗北」などを上げながら、「あの日から5年たったが、震災から5年ではない。

震災は今もいている」と指摘しました。



そして日本列島は、東日本大震災をきっかけに大地震や火山噴火が頻繁に起きる『大地動乱の時代』を迎えたのではないかと、言われている。今や日本列島はどこでも巨大な地震や津波に見舞われるかも知れないことを心にとめそのことを子や孫の次の世代に伝えていかなければならないと述べました。

その上で、東日本大震災では小中学生が津波から避難した“釜石の奇跡”が注目された。釜石では群馬大学の防災教育の専門家を招き、津波の時は家族一緒ではなく各自がてんでんばらばらに逃げる、「津波てんでんこ」の教育を徹底的に行った。その結果、学校にいた子どもたちは全員、無事だった。

誰かの指示を待つのではなく、一人ひとりが自分の頭で判断して逃げる。

「てんでんこ」には、そうした意味があるということを含め、伝えていく必要があると強調しました。



最後に、2011年6月に制定された東日本大震災復興基本法は、「震災復興、は新たな地域社会の構築であり、21世紀半ばにおける日本社会のあるべき姿を示す」と定めている。被災自治体の取り組みは、先進的な役割を担っており、日本の未来を照らし出すものになる、ということを忘れてはならない。

そのために「子や孫に何を残したのか、これから何を残せるか、生き延びることができた私たちの課題であり、未来への責任ではないかと思う」と述べ、講演を締めくくりました。



会場のホワイエでは、宮城県と岩手県のアンテナショップの物産即売や気仙沼の会社が委託された「大津波」の2D版DVD販売なども行われ、名産品などを買い求める人たちで大賑わいでした。



3時間余りの長丁場でしたが、多彩な内容は好評で、とりわけ池上氏の講演は多くの人から高く評価する声が寄せられました。

II. 企画展示 檜佐文野写真展「東北の学校」



全日本大震災5周年チャリティイベント「あの日をつなく」全国展開

楡佐文野 写真展
「東北の学校」
Schools in Tohoku

2016 3.6.sun—3.9.wed

9:00~12:00(18日) 12:00~ 99~12:00

宝庫シビックセンター1F ギャラリーシビック <入場無料>

1. 1990년 1월 1일 현재 100만 원 이상 자산이 있는 가구의 수: 1,234,567 가구

日時：2016年3月6日～9日

場 所：文京シビック 1 F／ギャラリーシビック

撮 影：檜佐文野

入場料：無料

入場者：総計1,207人

主 催：石卷支援三七会

共催：文京区

後援：宮城県、岩手県、石巻市、㈱NHKメディアテクノロジー

協 賛：(株)ニコン

協力：(株)プロテック、宮城ふるさとプラザ、
いわて銀河プラザ、気仙沼ワークス

文京シビック 1 階にあるギャラリーシビックでは、イベントに併せて 6 日から 9 日までの 4 日間、企画展示 檜佐文野写真展「東北の学校」を開催しました。この作品は、ニューヨーク在住のフリーカメラマンが震災直後から母親の出身地宮城県石巻市の小中学校を中心に消えてしまった子どもたちの生活に焦点を当て、2013 年初めまで帰国するたびに被災地の学校にカメラを向け続け撮影したものです。2012 年の IPA (International Photography Awards) のコンペで建築部門の 1 位を受賞したほか、2013 年ニューヨーク芸術財団写真部門でもフェローシップを受賞しました。



会場には一連の作品のうち28点の作品が展示されました。



初日の6日には、イベント参加者の半数を越える640人がつめかけました。2日目以降も、文京シビックのカルチャースクール帰りの人や税金の申告に訪れた人など連日200人前後が訪れ、4日間の来場者は異例の1,207人に上りました。





アンケートに答えていただいた方も77人を数えました。



○人々の記憶が薄れて行く中で、当時の様子を特に学校に焦点を当て写真に残されたことは大変貴重なことだと思いました。子供達の日常が一瞬にして奪われたことに胸が痛みます。

日本人一人ひとりが3.11を忘れずに助け合って行かなければと思いました

○出来れば夢であって欲しい悲しい写真です。でも現実だった記録写真。

これから夢のある子供たちへの引き継ぐべき内容なのかもしれません。

○被災の様子が行っていない者にまで良く分かるようです。

写真の芸術性によって普通の取材写真より印象に残るような気がします。

悲惨な写真にもかかわらずどの写真にも美しさと暖かさを感じます。

○この日、私の二人の娘は小学校と中学校にいました。同じ年の子供たちも沢山亡くなり、悲しかったあの時間が又思い出されました。風化しないようこのような写真展が全国で催されると良いなと思います。



○1枚1枚がとても儚く、改めて忘れてはいけない一生の1ページだと思いました。その中でも、校舎の廊下に陽の光が差す写真が印象的でした。

○よくぞ現場に！ありがとうございます。

写真に見せて貰えなかったら、ただの事柄でしかなかったでしょうに。

「百聞は一見に如かず」津波の爪痕。火事。

ひな祭りだった。赤いランドセル。

鳥肌が立ち、胸が熱くなりました。勇気に感謝！

○入口のパネルに目が止まり立ち寄らせて頂きました。

教員をやっているので、あの日のあの瞬間は忘れられません。

これから教える子供達は大きくても、当時、保育園か幼稚園。

あの日を知らない世代になります。

この展示で拝見した写真を是非、教育活動に活用させて頂ければと思います。



写真はあの時に静止してしまった学校の姿を静かに語りかけてきます。
 きっとその中の1枚1枚が、現地に行った人、行きたくとも行けなかった人、
 行けずに思っていた人、それぞれに深い印象を与えたことでしょう。
 今だからこそ、風化しそうな時期だからこそ、通りすがりの人と云えども、
 写真展に足を運び、募金箱に協力してくれる人の思いは同じだったのではない
 でしょうか？

<檜佐文野>

4日間で1,207人という、たくさんの方々に見ていただくことができました。
 5年という歳月が経ち、あの日が遠くなりつつあるかもしれない人々の心に、
 また、あの記憶を生々しく思い出させることが持つ意味の重さを考えました。



今回、思い切って日本でこの写真展を開き、現地の方々を含め多くの方々と直接お話できたことで、やはりあの時、撮りに行って本当によかったと思いました。

日本が未来に向う過程で、あの日の記憶をつなぐ役割のほんの一部をこの写真たちが担うことができれば幸いです。

ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

【イベントを振り返って】

被災地では、一日も早い復興に向けて懸命の努力が続けられています。

しかし首都圏では、震災や被災地ことが話題に上る機会は確実に減っています。その一方で、首都圏直下地震や南海トラフ巨大地震の可能性が指摘されるようになりました。

こうした状況を踏まえ、私どもは「東日本大震災を見つめ直して欲しい」と考え、今回の催しを敢えて東京で開催しました。

被災地に元気をおくと同時に、あの日の記憶を未来に語り継ぐこと。

そして単に語り継ぐだけでなく、来るべき大地震にどう備えるか。

そのために、どのような社会を作っていくべきか。この催しが、そうした問題を改めて考えてみるきっかけになればと思います。

今回のイベントを通じてお寄せ頂いた皆さまからの募金は、宮城県と岩手県の震災遺児・孤児を支援する基金に寄付させていただきました。

ご協力、ありがとうございました。

今回のイベントに当たって、共催を引き受けていただいた文京区をはじめ、後援をいただいた宮城県、岩手県、石巻市、(株)NHKメディアテクノロジー、協賛の(株)ニコン、そして宮城ふるさとプラザ、いわて銀河プラザ、(株)プロテック、気仙沼ワークスに、多大のご支援、ご協力をいただきました。

心から感謝と御礼を申し上げます。

また、出演していただいた池上彰氏をはじめ、鈴木あいさん、多くの関係者、それに事務局業務を手伝ってくれた首都圏在住の同期生、そして、わざわざ上京してくれた石巻の同期生にも御礼を申し上げます。